

『千載佳句』の校勘

妹尾昌典

金子彦二郎著『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研

究篇』(注二)に上野図書館蔵(現国立国会図書館蔵)『千載佳句』が校訂翻字されて以来、此の書の研究も漸く盛んになり、現在では、此の書に関する論文も幾つか見られるまでになった。但し金子氏が研究されていた時分には国会図書館蔵本以外はあまり知られておらず(金子氏は書中で「管見に入った唯一の本」とされている)、また校訂にあたっては『全唐詩』を中心に用いられたので、今から見ると校訂に不備な点も少なくはない。そこで本稿では『千載佳句』の校勘という内容で、具体的に例を挙げながら筆を進めることにする。

四、『国本』(国会図書館蔵本、近世中期写)

五、『金本』(『国本』を金子彦二郎博士が校訂翻字されたもの)

※『千載佳句』の本文は、詩句の下に小字で右に作者・左に詩題を記しているが、活字化する都合上、引用に際しては小字は用いないこととし、また、朱引き・ヲコト点・返り点・堅点は省略する。その代わりに、『松本』『甲本』の点を参考にして書き下し文を附すことにする。『千載佳句』以外の引用書で本文に小字を含むものについては、小字の部分を括弧()を用いて示す。『千載佳句』以外の引用書から詩題を引く際には、括弧∧∨を用いて示す。『金本』に施されている振り仮名・返り点・送り仮名は『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』に載せる詩句はそれによったものであり、それ以外は金子氏が試みに附されたものである。

1 『千載佳句』卷上・四時部・春興・三二

『松本』洲香杜若抽心長 砂暖鶯鶯鋪翅眠 白

『甲本』洲香杜若抽心長 砂暖鶯鶯鋪翅眠 白

『乙本』(内閣文庫蔵本、近世初期写)

『甲本』洲香杜若抽心長 砂暖鶯鶯鋪翅眠 白

昆明春水滿

『乙本』 洲香杜若抽心長 砂暖鴛鴦鋪翅眠 白

昆明春水滿

『国本』 洲香杜若抽心長 砂暖鴛鴦鋪翅眠 白

昆明春水滿

『金本』 洲香¹ 杜若抽心長² 砂暖³ 鴛鴦鋪翅眠⁴

白 昆明春水滿

1 (朗) 芳 2 (通) 短 (朗) 長 3 (通) 沙

〔書き下し文〕 洲 (す) 香ばしくしては杜若 (とじゃく) 心 (な) かく (こ) を抽 (ぬき) いで (て) 長せり。砂 (いさ) (こ) 暖くしては鴛鴦 (うゑん) (つ) ばさ (き) を鋪 (し) きて眠る。

〔校勘記〕 ○「香」を『倭漢朗詠集』(注二)・『倭漢抄』(注三)・『和漢朗詠集私注』(注四)には「芳」に作る。『説文解字』(注五)の「香」説解に「芳也」とある。「香」「芳」は同義で且つ疊韻。『楚辭』(注六)の《九歌・湘君》に「采芳洲兮杜若」とあり、『謝宣城集』(注七)の《懷故人詩》に「芳洲有杜若」などとあるので、『倭漢朗詠集』が「芳」とするのも故無きことではないように見えるが、『倭漢朗詠集』や『新撰朗詠集』は、詩句を「妄意に改め」ることがあるのは既に『梅村載筆』(注八)にも指摘があるところである。況んや朗詠のように暗唱されて伝わるものに於いては、「香」とある字が「カン・パンクシテハ」と暗唱されたものを再び文字で表記する際に「芳」の字で書くような場合が生じても不思議はない。事実、傳淨弁筆『和漢朗詠集』(注三)や菅原長親校『和漢朗詠集』(注四)のように「香」としたものがあつた。また、『金澤文庫本』(注九)・『神田本』(注十)・『那波本』(注十一)・『馬本』(注十二)・『汪本』(注十三)・『全唐詩』(注十四)・『箋校』(注十五)など現存の白居易の詩集

や『樂府詩集』(注十六)などにいづれも「香」とあるからには、今のところはやはり「香」としておくべきである。○「長」を『紹興本』(注十七)・『那波本』・『樂府詩集』・『馬本』・『汪本』・『全唐詩』・『箋校』はいずれも「短」とするが、『金澤文庫本』は「短」の左傍らに小字で「長」と書き、『神田本』・傳行成筆『倭漢朗詠集』・『倭漢抄』・傳淨弁筆『和漢朗詠集』・菅原長親校『和漢朗詠集』・内閣文庫蔵『和漢朗詠集私注』は「長」としており、『千載佳句』の本文は我が国の舊抄本と一致するものがある事を示している。『白氏文集』(注十八)は「短」を「長」に校訂し、「各本誤短。樂府本亦誤。從神田本・時賢本・猿投本。敦煌本・諷諫本同。」としている。この詩は昆明池のあたり(帝王の膝下の都)ばかりが恩澤で十分に潤っていて、地方には及んでいないので「王澤を廣く被らしめん」とした諷諭詩である。此の二句は昆明池が春たけなわの状況を詠じたものであるから、「抽心短」(春まだ浅い感じを与える)よりも「抽心長」(杜若も十分に成長し、春の生命力に充ち溢れている感じを与える)の方が意味的にも妥当である(何となれば、「洲香」「沙暖」はともに天子の恩澤がゆきわたっている都の環境の良いことを喩えており、「杜若」「鴛鴦」はともに、暗に都の住民を指すと考えられるからである)。○「砂」を『千載佳句』以外は「沙」とする。「砂」を『廣韻』(注十九)では「砂」の俗字としているからいづれでもよいように思われるが、やはり「沙」とすべきであろう。管見に入った限りの『倭漢朗詠集』・『白氏文集』の注釈書には「洲香杜若抽心長」の句に対しては前に挙げたような典拠らしい句を載せているが、「砂暖鴛鴦敷翅眠」に関しては、典拠らしい句は何も載せていない。私は此の

句は、杜甫の《絶句二首》と題する詩の其一の結句「沙暖睡鴛鴦」に基づいて作られたと考えている。杜甫の詩集も管見に入った限りではいずれも「沙」であって「砂」としたものは見当らないから、『千載佳句』の「砂」も「沙」と改めるべきであろうと考える。○「鋪」は『倭漢朗詠集』(注二)、『倭漢抄』(注三)、『和漢朗詠集私注』(注四)は「敷」とする。『廣韻』では「鋪」と「敷」は同音であり義も近いが、「香」を「芳」としたのと同様に、同訓ゆえに生じた異同と考えられるので、『千載佳句』に「鋪」とあるままでよい。○詩題「昆明春水滿」を『敦煌本』(注十八)・『諷諫本』(注十八)・『汪本』・『全唐詩』は単に「昆明春」とするが、『金澤文庫本』・『神田本』・『紹興本』・『那波本』・『馬本』・『箋校』いずれも「水滿」の二字がある。『盧校本』(注二十)も本来は詩題には「水滿」の二字は無いのだとしているが、『金澤文庫本』などのように現存する『白氏文集』の中でも比較的に古態を留めているとされる本文にも既に此の二字が詩題に含まれているのであるから、白氏の自筆本の詩題にも、「水滿」の二字が存在していたと考える方が自然である。

2 『千載佳句』卷上・人事部・王昭君・四四九

『松本』一雙淚滴黃河水 願得東流入漢宮 陳潤

『甲本』一雙淚滴黃河水 願得東流入漢宮 陳潤

『乙本』一雙淚滴黃河水 願得東流入漢宮 陳潤

送王昭君

『国本』一雙淚滴黃河水 願得東流入漢宮 陳潤

『金本』一雙淚滴黃河水 願得東流入漢宮 陳潤

王昭君

(全) なし 1 (新朗) 家 2 (新朗) 棟國に作る、案ずるに、『陳潤』の誤寫、今(詩逸)による 3 (新朗) なし 『書き下し文』一雙(いつさう)の淚滴る黃河(くわうが)の水。願はくは東流(とうりう)を得て漢宮(かんきう)に入ること

を。 [校勘記] 市河寛齋は、『全唐詩逸』(注十四)に陳潤の句として此の詩を取めながらも、一方では、『日本詩紀』(注三十二)に津守棟國の作として収めているのは矛盾している。金子彦二郎氏・山田孝雄氏(珍書同好會叢書本『千載佳句』解題)ともに陳潤の作と考えられたようであるが、のちに豊田穰著『唐詩研究』(注三十二)に於いて、『全唐詩』に王偃の作として全詩が収められているという指摘がなされた。『全唐詩』(第十一函・第七冊・卷七七三、王偃)に、『明君詞』として「北望單于日半斜。明君馬上泣胡沙。一雙淚滴黃河水。願得東流入漢家。」とあり、此の詩は、『全唐詩』(第一函・第四冊・卷十九、相和歌辭)にも見えるが、詩題を《明妃曲》としている。実は此の詩は『樂府詩集』(第二十九卷・相和歌辭・四・吟歎曲)に王偃の《明君詞》として収められている。○「願得」を『樂府詩集』『全唐詩』は「應得」としている。いずれも用例のある語であり、平仄も一致しているので、一概に是非を決めかねる。平成二年度成城国文学会夏季大会に於いて、松本宏司氏より「願」と通用の「應」の草書体と、「應」の

草書体に類似したものとあるとの指摘があったが、『千載佳句』の諸本中に「願」を「慫」と書いたものが無いので、今のところは其の説には従わない。○「宮」は梅澤本『新撰朗詠集』(注二十三)・陽明文庫藏『新撰朗詠集』(注三)・樂府詩集・全唐詩・全唐詩逸「いづれも」家」に作る。「宮」(『廣韻』上平・第一・東韻)では、「斜」(下平・第九・麻韻)および「沙」(下平・第九・麻韻)と押韻しない。「家」(下平・第九・麻韻)と改めるべきである。○「乙本」は「送王昭君」の「送」を消した痕跡があり、『国本』には「送」が無いのは、『国本』は「乙本」の転写本(注二十四、あるいは中間に一本を介した転写本(注二十五)とする説を裏付けているように思われる。一方で『新撰朗詠集』が題を「王昭君」としているのも注目されるが、この詩の本来の題を確定することは現在のところ難しい。『千載佳句』は唐代の旧を伝えていると思われる点が少なくないが、一方で作者名を誤ったり、詩題を略記している場合も少なくない。

3 『千載佳句』卷上・四時部・秋夜・一九〇

『松本』水渚三更聞過雁 西城万井動寒砧 皇甫公 秋夜

『甲本』水渚三更聞過雁 西城万井動寒砧 皇甫公 秋夜

『乙本』水渚三更聞過雁 西城萬井動寒砧 皇甫公 秋夜

『国本』水渚三更聞過雁 西城萬井動寒砧 皇甫公 秋夜

『金本』水渚三更聞過雁 西城萬井動寒砧 皇甫公 秋夜

(全)なし(詩逸)これを脱す

〔書き下し文〕水渚には三更に過雁を聞く。西城の万井に寒砧を動(ひびか)す。

〔校勘記〕金子彦二郎氏が『全唐詩』になしとされた皇甫公の詩句は、いづれも『全唐詩』(第四函・第七冊)に皇甫冉の作として収められている。『千載佳句』の卷末には収載作者名とその収載句数が付記されているが、それには、四首の項に皇甫公・三首の項に皇甫冉の名が見える。つまり、皇甫公と皇甫冉を別人として扱っているかに見受けられる。しかし、『文苑英華』(注二二〇)に収める獨孤及の《左補闕安定皇甫公集序》を見ると、皇甫公は即ち皇甫冉を指していることが知られる。大江維時が直接原本の皇甫公集から詩句を採用したとすれば、当然その序文を読んで皇甫公と皇甫冉の同一人物であることは承知していたはずである。しかるに、ある詩句は皇甫公の作とし、ある詩句は皇甫冉の作としているような不統一をみると、個々の詩集(原本)から直接取り入れたのではなく、類似した名句選集のようなものから引用したとする可能性(注二二七)は否めない。○「水渚」は『唐皇甫冉詩集』(注二二八)・『劉隨州詩集』(注二二九)・『文苑英華』・『全唐詩』いづれも「北渚」としており、『文鏡秘府論』(注三二)・王力著『詩詞格律』(注三三)にも、方位を示す語は他の語と対になることは甚だ希である、という内容の記述が見えるから、「北渚」と改めるべきであろう。「水」と「北」は字形が近い。○「万井(萬井)」は『唐皇甫冉詩集』・『全唐詩』(皇甫冉)・『劉隨州詩集』・『全唐詩』

〔劉長卿〕は「萬里」とし、『文苑英華』・『全唐詩』（張南史）では「萬木」とする。「万井（萬井）」と「萬里」とは略ぼ同義。また「井」と「木」の草書体は類似するものがある。平仄の点からはいずれが是か非かを決しがたいが、「萬木」では意が通じにくい上に、原詩の第二句目に「結茅栽樹近東林」とあるのと齟齬をきたす感がある。○この詩は実に作者が三人も擬せられている。「全唐詩」を見ると、皇甫冉・劉長卿・張南史は、互いに詩のやりとりをしていたことが知られる。このような状況の下では、本人以外の者が詩集を編む場合（たとえば本人の死後に、家族や友人の手によって詩集が編まれる場合）に、本人に贈られた知人の作品が紛れ込むという可能性が生じるかと思う。『千載佳句』（中国でいえば五代の頃の成立）が皇甫冉の作とし、『文苑英華』（中国の北宋の初め頃に成立）が張南史の作としているということは、既に唐代に於いて作者が紛れていたということを物語っている。

4 『千載佳句』卷上・四時部・早春・一三三

〔松本〕西池水冷春巖雪 南陌花香曉樹風

許渾 移攝太平寄

汝洛舊遊

〔甲本〕西池水冷春巖雪 南陌花香曉樹風

許渾 移攝太平寄

汝洛舊遊

〔乙本〕西池水冷春巖雪 南陌花香曉樹風

許渾 移攝太平寄

〔国本〕西池水冷春巖雪 南陌花香曉樹風

許渾 移攝太平寄

汝洛舊遊

〔金本〕西池水冷春巖雪 南陌花香曉樹風

許渾 移攝太守寄汝洛

舊遊

1 (全) 浦 (一作陌) 2 (全) 曉 (一作晚) 3 (全)

陵陽春日 (一作移攝太守) 寄汝洛舊遊 4 原本平とあり今

(全) による

〔書き下し文〕西池(せいち)には水冷(すさま)じ春巖の雪。南陌に花香ばし曉樹の風。

〔校勘記〕○『文苑英華』に詩題を《移攝太守(集作陵陽春日)寄汝洛舊遊》とし、『全唐詩』は《陵陽春日(一作移攝太守)寄汝洛舊遊》とし、『許用晦文集』(卷三十一)・『丁卯集』(卷三十三)は《陵陽春日寄汝洛舊遊》としているが、許渾には別に《移攝太平寄前李明府》と題する詩があり、『許用晦文集』・『丁卯集』・『文苑英華』・『全唐詩』いずれにも収められている。「讀史方輿紀要索引」

中國歴代地名要覽(卷三十四)に據れば、「陵陽」と「太平」とは同一の地を指していることが知られる。また、「唐才子傳」(卷三十五)によれば許渾が太平縣の縣令を勤めたことが知られる。ゆえに、金子彦二郎博士が原本の「太平」を「全唐詩」に拠って「太守」に校訂されたのは誤りで、ここは原本の「太平」のまままでよいと考えられる。ここでは寧ろ、『千載佳句』の記事によって『文苑英華』や『全唐詩』の記事を正すべきである。○序でながら、

「眺」と「晚」とは草書体の字形が近かったためか、紛れ易かつたらしく、錢起《贈闕下裴舍人》詩「春城紫禁晚陰陰」(明活字本『錢考功集』四部叢刊)の「眺」を『文苑英華』(卷二五三)では「晚」とし、また、『凌雲集』(注三十)に載せる淳和天皇の《奉和江亭晚與呈左神策清藤將軍》詩(世良亮一著『凌雲集詳説』昭和四十一年プリント印刷では「榮清」を抹消して「策衛」に校訂している)を『日本詩紀』(卷三)では《奉和江亭眺與呈左神策清藤將軍》とする例がある。

以上、見てきた通り、『千載佳句』の本文は唐代の古態を残している箇所(長所)とそうでない箇所(短所)が混在しているのである、今後さらなる校勘、およびそれに伴う研究が為されるべき作品であるかと思われる。私が今回用いた近世の写本以外にも、『千載佳句』の鎌倉期写本(但し私が嘗て見たところでは、三十九番から六十六番までを闕く。旧版『國書總目録・補遺』(注三七)に「中山忠敬、二帖、重文」と載せるものかと思う。)が佐倉に在る国立歴史民俗博物館に所蔵されており、太田次男氏が古典文庫に校訂翻刻される予定とのことなので、期待される。なお、旧版『國書總目録』では、他に御茶ノ水図書館の成賞堂文庫にも近世の写本があると載せているが、館長の話では、昭和十九年までの資料では確認できるのであるが、現在はその所在が確認できず、成賞堂文庫には所蔵していないとのことである。

最後になってしまったが、本稿に引いた珍書同好會叢書(大正四……八年)本『千載佳句』は、稿者は長く見る機会に恵まれなかったが、学会に御来聴くださった龜井孝先生より下賜されたものであ

る。感謝の意に勝えない。

※以下の注に引く書物の出版年は、必ずしも初版の刊年ではない。

(注一) 昭和十八年、培風館。藝林舎の昭和五十三年の増補版もある。

(注二) 山田孝雄校訂、書陵部蔵伝行成筆本、一九八九年、岩波文庫

(注三) 伝行成筆本『倭漢抄』、伝淨弁筆『和漢朗詠集』および伝寂蓮(他一人)筆『新撰朗詠集』を収める。『和漢朗詠集・新撰朗詠集』

陽明叢書圖書篇第七輯、昭和五十三年、思文閣

(注四) 枋尾武編『国会図書館蔵和漢朗詠集・内閣文庫蔵和漢朗詠集私

注・漢字総索引』新興社索引叢書1、昭和六十年

(注五) 孫星衍本、中国學術名著第二輯、民国六十八年、世界書局

(注六) 星川清孝著、底本は『楚辭章句』、明治書院新釈漢文大系、昭和四十五年

(注七) 四部叢刊明鈔本、遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』北京中華書局、一九八三年

(注八) 日本隨筆大成新版第一期の一、吉川弘文館、昭和五十年

(注九) 大東急記念文庫蔵、『金澤文庫本白氏文集』川瀬一馬解説、昭和五十八年、勉誠社

(注十) 小川芳規・太田次男共著『神田本白氏文集の研究』昭和五十七年、勉誠社

(注十一) 陽明文庫蔵、『白氏文集歌詩索引』一九八九年、同朋舎

(注十二) 馬元調校・立野春節校『白氏長慶集』和刻本漢詩集成・唐詩汲古書院、昭和四十九年

(注十三) 汪立名校訂『白香山詩集』民国十三年、分齋書局が一隅草堂原本に據り校正石印

(注十四) 揚州詩局本、卷末に知不足齋叢書本『全唐詩逸』を附す、一九八六年、上海古籍出版社

(注十五) 朱金城箋校『白居易集箋校』、底本は明の馬元調校本、一九八八年、上海古籍出版社

(注十六) 汲古閣本、四部叢刊、商務印書館

(注十七) 『白氏長慶集』紹興刊本、民国七十年、藝文印書館

(注十八) 平岡武夫・今井清校訂、わが国の旧鈔本を初め博く諸本を覽て異同を示している、京都大学人文科学研究所、昭和四十六年

(注十九) 『校正宋本廣韻』張氏澤存堂本を北京大学の周祖謨教授の『廣韻校勘記』に據り校正、民国七十年、藝文印書館

(注二十) 盧文韶校『白氏文集』百部叢書集成、抱經堂叢書・羣書拾補

(注二十一) 内閣文庫藏市河寛齋浄書本、詞華集日本漢詩第三卷、昭和五十八年、汲古書院

(注二十二) 昭和二十三年、養徳社

(注二十三) 『新編国歌大観』第二卷・私撰集編、昭和五十九年、角川書店

(注二十四) 川口久雄著『三訂、平安朝日本漢文学史の研究・中』大江

維時と日観集・千載佳句、昭和五十七年、明治書院

(注二十五) 金原理著『平安朝漢詩文の研究』松平本『千載佳句』について、昭和五十六年、九州大学出版会

(注二十六) 一部分は宋版、但し該当箇所は明版、一九八二年、北京中華書局

(注二十七) 『中國文学報』第十七冊「の神田喜一郎氏「日本に於ける杜甫」および川口久雄氏の前掲著

(注二十八) 明版、四部叢刊

(注二十九) 宋抄本、四部叢刊

(注三十) 王利器校注『文鏡秘府論校注』、底本は京都藤井佐兵衛版行本、一九八三年、中国社会科学出版社

(注三十一) 第二章・第四節・(一)对仗の種類、一九八二年、北京中華書局

(注三十二) 民国五十七年、臺灣中華書局

(注三十三) 宋鈔本、四部叢刊

(注三十四) 昭和四十九年、省心書房

(注三十五) 周本淳校正『唐才子傳校正』、底本は佚存叢書に翻刻された日本の五山版、一九八七年、江蘇古籍出版社

(注三十六) 『羣書類従・第八輯』百二十三卷、奥付に「右以弘文院本及

太田覃本校正了」とある。昭和三十五年、續群書類従完成会

(注三十七) 昭和四十七年、岩波書店